

## 新版 全国衛生研究所見聞記

### 【其の8】

## 山形縣衛生研究所之巻



### はじめに（體言止多用失禮）

2007年9月6日午前9時、折しも南方海上より關東地方に向かって北進しつつある颱風九號に追い立てられるかの如く、東京驛から山形新幹線に乗車。先年沖繩環衛研を訪問した時は、大雨洪水の本州から遁走するかの如く西方の極樂オキナワへと飛び、何かしらウシロメタイ気持ちを感じ得なかった探訪子であるが、今回の行き先は颱風豫想進路の眞只中にあるので、「逃げるという負目が無い分だけ今回は気が楽だ」等と勝手な自己暗示を掛けながらパソコンのメール通信に没頭。隣席に座す威風堂々の紳士は窓外を眺めつつ沈黙思考。没頭と黙考の間には接点のありようがなかったが、探訪子のパソコンのバッテリーが突如切れたことにより、手持ち無沙汰になった没頭が黙考に俄然關心を抱くことになった。黙考紳士が手にしている書類を横目で盗み見ると、「全國ママさんバレー云々」という文字が直ぐに目に入った。そういえば、別車輛に乗車した編集部大森圭子女史から「今回はママさんバレーの為にホテルも新幹線の切符も取るのが大変だった」という話を聞いていた。恰幅の良さ等から推理して此の紳士はママさんバレー全國大會の役員（ひょっとしたら會長）なのかもしれない。「ママさんバレーが醸し出す不思議な色氣」について對話してみたい気持ちがムラムラと湧いたが、抑えた。もしかして會長挨拶の文言を御考え中だったとしたら、色氣等という話題は不謹慎だろうからである。しかたなく、此の話題については自問自答することに決めた。それにしても新幹線は速い。自問自答が完結せぬままに山形驛に到着。

同じ新幹線に途中乗車し山形驛プラットフォームで合流した榮研化學の荒川正明氏と牛久保宏氏を加えた四名は、驛前で「簡単な昼食」を摂った後、夕

クシーで山形衛研へと向かう。「山形は金もないが災害もないから颱風の心配は無用」という運轉手氏の軽口を無邪気に聞き流した我々は、いつも通り、懲りることなき能天気。そういえば、出発の二日前に届いた自稱「雨女」=大森氣象豫報士見習からのメールにも、降水確率は書いてあったものの颱風に關しては何の記載もなかったことを憶い出す。

定刻13:30に山形衛研到着。玄関には會田健氏（生活企畫部研究企畫専門員）が出迎えて下さっている。

下足を脱ぎスリッパに履き替えた。どうでもよいことかもしれないが、どのスリッパにも「衛研」の二文字が金色に輝いていた。まさに脚下照顧の証拠物件である。



寫眞1 脚下照顧！

### （I）阿彦忠之所長の御話を聞くうちに探訪子の腦裡に新たなキーワードが浮上

恒例により、最初に訪れたのは所長室。探訪子にとって今回は5カ所目の衛研訪問（神奈川、愛知、沖繩、和歌山に次ぐ）であるが、行く先々の衛研の所長が一人の例外もなく皆個性豊かな人達だったので、いったい今度の阿彦忠之（あひこ・ただゆき）先生はどんな人なのだろうか、研究の内容より人物への食指が先に動いたのは、至って自然のなりゆきである。

第一印象を迷わず書けば、阿彦所長は、これまで出逢ったどの衛研所長よりも遥かに若く、且つ遙かに美男子であった。學生時代に剣道部だったとの由

にて、スックと伸びた背筋が凛々しい。背後から拜見すると剣士の殺気が漂うが、正面に廻ると、含羞の柔和な笑顔が其處にある。和歌山の岩井所長には豪快な物言いとブラックジョークがよく似合っていたが、この阿彦所長には然様な『濃い味付け』は全く不必要であろうと思われた。実際、阿彦所長から聞いた山形衛研の概要説明は、淡々として端正なオーソドキシ―に貫かれていた。



写真2 淡々として端然たる阿彦忠之所長。其の自信の理由は最後の最後に判明した（気がする）。

しかし、ツマラナイと思う人にはツマラナカタかもしれない此の阿彦所長のニュートラルでスマートでナイーブでエレガントなオーソドキシ―の背後には、いや隣には、若殿に寄り添う閣将軍の如く、あるいは安倍（前）首相に寄り添った麻生（前）自民党幹事長の如く、見るからに経験豊富で老獪そうな『濃い味付け』の人品骨柄の所有者であるところの .....（修飾語が長くて失禮）..... 齋藤一夫技監が悠然と座し、時折『毒を含んだ言辭』の口添えをしては、元來下品な探訪子達を楽しませ、同席の副所長達をば苦笑（あるいは顰蹙）せしめつつ、所長のエレガンスとの間に絶妙のバランスを取る役割を充分以上に果たしておられた。清濁併せ呑むのが好きな探訪子の個人的観点からすれば、阿彦所長と齋藤技監の此の好対照は、山形衛研にとって實に幸福な組み合わせである。特に、阿彦所長は山形縣健康福祉部の醫療擔當次長を兼任し、縣庁と衛研を日々往復する忙しき身にてあれば尚更、有能なバランス―としての齋藤技監の存在は非常に重要である。



写真3 齋藤一夫技監（中央）、その右に大谷勝實副所長と遠藤幸雄副所長、技監の背後に會田健専門員。

閑話休題。阿彦所長が仰った大變重要なことを書き忘れては不可。私の記憶に間違いがなければ、御發言の大略は、「衛研は、定められた検査業務をソツなくこなしていればいい、というのではいけないと思います。衛研での検査や研究によって、もし新情報や新発見や新技術が得られたならば、それを積極的に社會に向けて發信・還元して行かなければならないと考えています」という話だった。

考えている、だけではない。既に實行が伴っていた。ヒト・メタニューモウイルスの大量培養系の確立は、此處山形衛研に於ける快挙の一つであるが（詳しくは後述）、地味と云えば地味、普通に考えれば一般新聞記事のネタになるような話では決してない。にもかかわらず、2007年9月1日付の山形新聞に大きな記事（約20cm×20cm、倒立顯微鏡寫眞付き）が載っている（写真2の左下隅に寫っている紙片は其の記事のコピーである）。これは、阿彦所長がメディアに積極的に働きかけたから掲載されたのである。

しかし、新聞に掲載されたからといって、何のメリットがあるのか？ひょっとすると、衛研側の自己満足に過ぎないのではないのか？メディアの側にしても、頼まれたから載せたというだけではないのか？..... 讀者の中には斯様な疑問を抱懐する御仁がきつとおられると思うし、探訪子自身も同様の疑問を心の中で反芻した。この疑問への答を見つけ出す作業には數分を要したから、きっとその數分間の探訪子は阿彦先生達の話を上空で聞いていたに違いなく、その間に大事なことを聞き漏らした可能性が大いにある。しかし、やがて答

が出た。一言で云えば『答=リスペクト』である。

美しいもの、優れたもの、強いもの ..... 斯様な事物への憧憬と尊敬の念は我々の心の中に自然に存在しており、我々はそれらをリスペクトする。それらに接して「あっ、凄いな」と思った瞬間にリスペクトが生まれる。しかし、いくら美しくても、それが我々の眼にエクスポーズされていなければ、リスペクトの対象になり得ない。例えば、女優仲間由紀恵の姉上は由紀恵より更に美しいと『関係者』から何度聞かされても、姉上が我々『一般人』の眼の届かない場所に隠れ棲み續けている限り、「あっ、凄いな」になりようがない。同じことが、科学技術の研究成果についても云える。『関係者』が既に十分にリスペクトしている研究成果であっても、大半は『一般人』の眼からは隠されている。ヒト・メタニューモウイルスというウイルスについて完全に無知である一般人といえども、優れたものに接して感嘆する感受性は自然に具備しているから、新聞記事を読んで、「へえっ、山形衛研ではこんな立派な世界的な研究をやってるんだ」と感動し、その瞬間から山形衛研をリスペクトし始める人が必ず出て来る。

一般にリスペクトは、その数が多ければ多いほど、家庭内の、職場内の、地域社会内の、ひいては世界全体の平和に貢献するから、無条件に歓迎すべきなのである ..... (ジェラシーは逆だけど) .....。だから、阿彦先生達の此の努力は全然間違っていない! .....

探訪子の白昼夢が斯様な結論に到達しつつあった時、「さあそろそろ集合写真を撮りませう」の聲が聞こえて目が覚めた。前回の和歌山での収穫の一つは『竹槍で頑張る』というキーワードだったが、今回は『リスペクトが大事』になるかもしれないなあ、等と早くも原稿のことを考えながら腰を上げ、集合写真を撮り終えて2階の生活企畫部へと向かう。

## (Ⅱ) 研究主幹(兼)生活企畫部長の高橋裕一先生を探訪子は断固リスペクトする

1階から2階へ行くのに態々エレベーターを使ったのは、以心傳心で既に悪友三人組と化していた齋藤技監・大谷副所長・探訪子のトリオが、2Fを通り越して終点(屋上)まで行ってしまおうという魂胆を共有していたからだ。屋上の空気は格別である(我々は旨い空気を吸いに此處へ来たのだ)。

屋上から四圍遠景をグルリ眺めると、なるほど山形が盆地であることがよく解る。あの邊りが蔵王です、と大谷副所長が指差して教えてくれる。おや、雨だ。天気雨だ。早く2階へ行け!という天の御告げなのだろう。

2階の生活企畫部の一室では、山形衛研の研究主幹であり且つ生活企畫部の部長でもある高橋裕一先生が我々を待っていてくれた。ところが、名刺を交換し着席した途端に高橋主幹のデスクの電話が鳴り、デスクに行って受話器を手にした高橋主幹は中々戻って来ない。盗み聞きした譯では全然なく、5~6メートルしか離れていないから否應なく聞こえてしまい、今も探訪子の耳に残っている其の電話の一節は、「いえいえ、界面活性剤 ..... はい ..... ツイーンという ..... はい ..... ツイーン八十 ..... そうです、そうです」というフレーズである。この「ツイーン」という発音を聞いた瞬間に、探訪子は、嗚呼よかった!と思った。もし高橋主幹が「トゥイーン」と発音していたら、私は彼をリスペクトしない結果に終わったかもしれないのである。何故かと云うと、Tween 80をトゥイーン・エイティとハイカラに発音する日本人研究者が(探訪子を含めて)大半を占める中で、ツイーン・ハチジューと朴訥に発音するのは極めて少数派であり、しかも探訪子の知る限り、彼等は皆非常に優れた研究者であるのみならず「非凡なる善人」でもあるからである。



写真4 電話から戻って来た高橋裕一研究主幹。業績も容貌も非凡。

閑話休題、受話器を置いて戻ってきた高橋主幹から聞いたスギ花粉のアレルゲンに関する話は二重三重に探訪子を驚かせた。

先ず第一に、..... おっと其の前に、読者への説明が抜けていた。此處で取り上げるのは Takahashi Y et al. Relationship between airborne Cry j 1 and the onset time of the symptoms of Japanese cedar pollinosis patients. Allergology International 2007 ; 56 : 277-83 という論文に關することなのだが、論文を読むのが苦手な読者の為に、其處に記載されていることを手短かに述べると、「スギ花粉の飛散する前に既に花粉症の症状を出す人達がいることの理由が謎だったが、Cry j 1 というスギ花粉アレルゲンを超高感度で検出できる方法を用いて調べてみたところ、顕微鏡的に花粉飛散を確認し得るずっと前に、この Cry j 1 が既に飛散し始めていることを突き止めることができたので、爾今、花粉飛散情報に先立ちアレルゲン飛散情報を提供することにすれば花粉症に悩む人達にとって非常に有用であると思われる」という概略になる。

これが大變優れた仕事であることは云うまでもない。しかし、「感度を上げたらこうなった」という、アタリマエといえればアタリマエの話なのだから、探訪子の驚きは別のところに在った。

先ず第一に、この仕事で採用された『超高感度検出法 (ESR ラジカル・イムノアッセイ)』が、探訪子にとっては一種のデジャブ・サプライズだったのである。思い起こせば數年前、河田純男山形大學醫學部教授 (現同大副學長) が厚生労働省の肝炎等克服緊急対策研究事業の中に新規の研究班を立ち上げられた時、其の研究班の目玉が、此の ESR ラジカル・イムノアッセイによる超高感度 HBsAg 検出だったのである。探訪子を含む肝炎屋は皆、その非常なる感度の高さに吃驚すると同時に、臨床現場で用いるには「感度が高すぎる」という皮肉な感想を抱いた。そこら邊りの事情を詳しく説明するには紙幅が足りないので極く簡単に述べると、HBsAg の検出感度を上げるよりも HBV DNA の検出感度を上げる方が明らかに有意義だ、ということになる。探訪子自身も、當時、「折角斯様に超高感度に抗原を検出し得る技術なのだから、HBsAg 以外にも複数の有用な感染マーカーが存在する HBV 感染の如き疾病を対象にするのではなく、マーカーはソレシ

かない! という疾患を対象に選んでソレを検出する方がずっといい」という非公式見解を述べた記憶がある。で、結局、HBsAg からは撤退という顛末になった筈である。

だからこそ探訪子は吃驚しているのである。と同時に喜んでいるのである。と同時に大いにリスペクトするのである。ESR ラジカル・イムノアッセイという山形産の新技术に、それが真に活躍出来る場を見つけてあげた高橋主幹の慧眼を.....

扨て第二の驚きは、..... 何だったっけ?..... あっそうだ、あの論文の共著者の中に (株) ウェザーニューズという會社の人物が含まれていたことに吃驚したのだった。Cry j 1 の濃度と花粉症の症状發現との間に何らかの相關があるか否かを見る為には、不特定多數の人々から症状情報を得る必要があるが、偶々、携帯電話でアクセス可能な氣象情報サイトを持ち、各々のアメダス地點の氣象と花粉症との關係についての情報をリリースするサービスを行っていた (株) ウェザーニューズ社が、その目的の為に一役買ったという譯である。明らかに異業種である斯様な會社の活動と能力を取り込んで、一つの方向へと導いた高橋主幹の指南力に再びリスペクトを禁じ得ない。

第三の驚きは、..... もうやめよう。紙幅が減る一方だし、記憶が薄れてもいる。



寫眞 5 生活企畫部員集合寫眞。皆の視線の行方が區々なのは2台のカメラのどれを見てよいか迷っているからである。

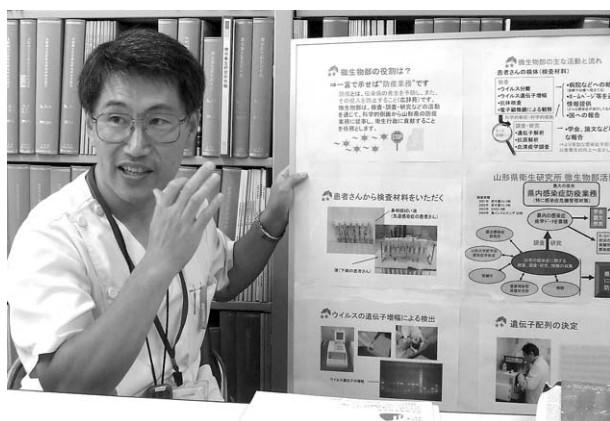
ラボ内のツアーを終えた後、集合寫眞を撮影したが、牛久保カメラマンと大森カメラウーマンのどちらのレンズを凝視すればよいのか、被寫體たる我々は大いに迷う (特に探訪子は、この後も夫々の部署で同じ被害を繰り返すので、遂には一過性の

外斜視を患うことになった)。

扱て、次は微生物部。おっと、しかし其の前に、高橋主幹について今一つ追記することを御赦し願う。別れ際に高橋先生から、「今はこんな仕事もさせられています」と一冊の雑誌を手渡された。日本花粉學會會誌である。彼は今、その編集長の任にあるという。嗚呼、何という奇遇であろうか。探訪子は日本肝臓學會機關誌の編集長。共に御互いの苦勞が解り合えるから、無言のうちに我々はエールを交換した。花粉と肝臓の接點は、カノ字とESRラジカル・イムノアッセイだけではなかったのである。

### (Ⅲ) 微生物部で出逢った「魅せられたる魂」達

微生物部を率いるのは水田克巳研究主幹である。東北大學の出身であり、ウイルス屋なら誰一人知らぬものなき仙台の巨魁、石田名香雄(いしだ・なお)先生の孫弟子である。即ち、ウイルスに魅せられた情熱的魂の系譜である。従って、彼が血氣盛んでない譯がない。



寫眞6 熱血漢、水田克巳研究主幹(兼)微生物部長。

アデノ、パラミクソ、エンテロ、等々.....水田主幹の守備範圍は實に広いが、彼の業績を網羅し始めると直ぐに紙幅が盡きてしまうので、此處ではAbiko C et al. Outbreak of human metapneumovirus detected by use of the Vero E6 cell line in isolates collected in Yamagata, Japan, in 2004 and 2005. J Clin Microbiol 2007; 45: 1912-9 についてのみ述べる。既に阿彦所長から御紹介頂いていた、例の新聞記事になった業績のことである。

何事につけ新発見には『偶然のいたづら』がつきものであるが、水田先生達の此の仕事も例外ではな

かった。2003年にSARSという新型肺炎が世界的な問題になった際、厚労省は全國の研究機關にSARSウイルス培養の為の各種細胞を配布した。そして、偶然にも、供與された細胞のうちVero E6というcell lineが、2001年にオランダで発見されたものの中々うまく培養できないでいたmetapneumovirusというパラミクソウイルスの培養に適していることを、水田先生達は発見したのである。實にセレンディピティーの好例である。

折角偶然の恩恵を授かったとしても、授かった人物に力量と情熱がなかったならば、到底新発見には至らない。水田先生達に力量も情熱も共にあったればこそ、此の発見は達成されたのである。過去の衛研見聞記の何處かに既にかいたかもしれないが、衛研はサンプルの寶庫である。それらのサンプルは、元來、或る特定の検査を目的として衛研に持ち込まれたものかもしれない。しかし、見よ！此の衛研の實力を！検査が終われば廃棄してしまったかもしれないサンプルと、SARSウイルスが検出できなかったら捨て去ってしまったかもしれない培養細胞から、斯くの如き見事な科學的価値を彼等は生み出したのである。彼等をリスペクトしよう。そして、彼等の然様な情熱の迸りを、鞭打ってそうさせるのではなく温顔を以て無言のうちに督励し續けている阿彦所長をば、もっともっとリスペクトしよう。

扱て、探訪子は微生物部に今一人の「魅せられたる魂」の持ち主を発見した。金子紀子専門研究員である。そして、彼女を魅了しているのはダニ(ツツガムシ)だ!.....



寫眞7 ダニに魅せられた淑女、金子紀子微生物部専門研究員。

山形には最上川がある。秋田の雄物川、新潟の信濃川と阿賀野川と共に嘗ては「恙虫（ツツガムシ）病好発流域」として名をはせた。一旦は完全に消滅したかに思われた恙虫病であったが、1976年に再出現し、今では北海道・沖縄以外の全国津々浦々で散発的に発生している。山形県でも、1980年に14年ぶりの患者が出て以来、毎年発生しているとの由。早期診断して適切に治療しないと多臓器の障害が起こり死に至る場合もあるから、衛研での血清學的検査やNAT検査が果たす役割は極めて重要である。そして此處、山形衛研では金子女史がその役割を担っているという譯だ。

ダニが好きですか？という探訪子の問いに、何の街いもなく、「はい、好きになりました」と即座に彼女は答えた。フトゲツツガムシとアカツツガムシの鑑別の為、實體顯微鏡で足の毛の太さや数を観察したりしているうちに、だんだんダニが好きになって来たそうである。マイコプラズマやレジオネラも彼女の守備範囲なのだが（付記：レジオネラ症の山形縣に於ける発生率が人口10萬對0.48であって全国の同0.15を遥かに上回っているのは温泉が尋い所為なのだろうか？）、矢張り彼女はダニに最も魅せられている。

好きこそモノの上手なれ、である。いずれ将来、彼女が「オバサン」と呼ばれる年齢に達した頃、きっと『金子紀子著：山形ダニ類圖鑑』が上梓されるだろうと、探訪子は豫想する。



寫眞8 微生物部部員集合寫眞、壁の時計の針は『或る日本記録』の証人になるかもしれない。

#### (IV) コーヒーブレイク：天気雨

この邊りで一寸休憩を取りませうか、と促され階

下の所長室へ戻る途中、廊下の窓から戸外を見やっ  
て驚いた。天気雨が降っている。

また降り出したのか？それとも、まだ降り續いていたのか？「また」と「まだ」の違いは大きい。もし後者だとしたら、ひよっとするとこれは『天気雨持續時間』の日本記録じゃないだろうか。今夏、最高気温の日本記録を破られたばかりの「負けず嫌い」の山形の為にも、然様な記録が存在するの  
かしないのか、是非とも（株）ウエザーニューズ社に調査を御願ひしたい。探訪子は、其の天気雨の降り始めが午後2時過ぎ頃であって、其の後一旦止んだかどうかはいざ知らず、3時40分（寫眞8参照）にはまた（orまだ）降っていたことを、本稿を以て証言する。快晴の山形上空に南東方向から雨雲が迫り、その雨雲は「非常にゆっくりとした速度で北上しつつある颱風9號」によって齎されたのだとすれば、午後の「西に傾く太陽」は、雨雲から逃げる方向へとドンドン傾いて行く譯だから、長時間に亘って天気雨が降っても全然おかしくない……そんなことを考えながら所長室に戻って来た探訪子であったが、……

あれっ？何か食欲をそそる匂いがするぞ。何なんだ一體、これは？……

この疑問への答は今バラすべきではない。さっさと御茶を一杯だけ頂戴し、最後の部門である理化學部へ赴くことにする。

#### (V) 理化學部の佐藤和美研究主幹（兼）部長と笠原義正研究調整専門員から聞いた話がモッテホカ面白かったのには譯がある

その理由の一つは、そろそろガス欠に達しつつあった探訪子の grey cells が次第に機能低下して来たことにより、面白い話にしか反應できなくなって来たからである。

今一つの理由は、佐藤・笠原両先生とも非常に話上手であって、殊に笠原先生は『知的ロマンチスト』という稱號を以てリスペクトするに値する、理系研究者には實に稀な文學的リテラシーの持ち主だからである。

偶々机の上に置いてあったトリカブトという有名な毒草の話から始まり、ツキヨタケという毒茸、モツ



写真9 佐藤主幹(右)と笠原専門員(左)とトリカブト(手前)。

テノホカと地元では呼ばれている食用菊、そしてベニバナ(紅花)へと.....話題は多岐に及んだが、探訪子にとって最も面白かったのは紅花に関する話であった。それもその筈、笠原先生は知る人ぞ知る紅花研究の大家であって、今日のような面白い話を、膝詰めで、しかもタダで聞くことを得たのは非常な幸運だった。ところが、そのような幸運を享受したのは探訪子ひとりだけではなかったらしい。その時は全く気付かなかったが、後日編集部から送られて来た当日の取材写真のCD-ROMを開いてみたところ、なんと、いつの間にか阿彦所長が部屋に入って来て、笠原先生の話に興味深そうに聞き入っているではないか。

丁度此の写真の場面で笠原先生が我々に説明してくれているのは、本草綱目(李時珍著)に記されている紅花の効能に関する部分であると思う。震亨によれば「多く用ふれば留血を破り、少なく用ふれば血を養う」そうであり、時珍によれば「血を活し燥を潤し、痛を止め腫を散じ、経を通ず」ということだから、なるほど、古來紅花が婦人薬として重寶されて来た譯である。

しかし、紅花が薬草である所以は何も古書の記載と民間傳承の中にだけあるのではない。成分や薬理が此の紅花ほど徹底的に研究されている薬草はないのではないかと思うほど、鎮静鎮痛、筋弛緩、抗炎症、末梢血管拡張、抗腫瘍、免疫抑制等々、様々な

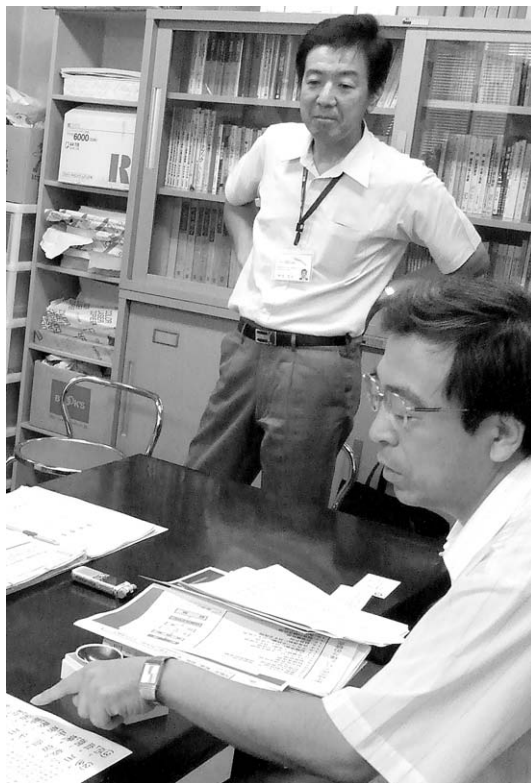


写真10 只見客(阿彦所長)まで出た笠原先生の紅花講話。

薬理作用が報告されている。謙虚な笠原先生は御自分では仰らなかったが、探訪子が東京に戻ってから(氣になったので)インターネットで検索してみると、紅花の成分が持つ薬理作用に関係するところの、笠原先生が發明者の一人として加わっている公開特許公報を少なくとも二つ(一つは抗アレルギー作用、もう一つは抗腫瘍作用)見つけることが出来た。虚學ならいざ知らず、實學なら矢張り特許まで行くべきである。素晴らしい!



写真11 ベニバナ・ルージュ・カップ。

これ(写真11)は笠原先生を尊敬する気持ちの印として探訪子が進呈した金盃である.....嘘です、真っ赤な嘘です。紅色の嘘!

カラーで御見せ出来ないのが残念だが、この盃の内面に塗ってある色こそが紅花の紅なのである。女性が紅さし指(薬指の別名)の先端で此の盃の

内面を撫でて紅を掬い取り、それを唇に付けるのである。嗚呼、色っぽい。實に古典的な色氣である。ママさんバレーの今様の色氣とは全然次元が違う。

おっと、紙幅の残りが盡きなんとしていることを承知しながら、探訪子はまだまだ紅花の話を書きようとしている。佐藤主幹から聞いた「山形県は原子力発電所の無い県として、環境中の放射能レベルを調査しています」というような話を割愛してまで書きようとしている。しかし、如何に面白かった話とはいえ、例えば源氏物語に出て来る末摘花という姫君の名の由来に関する、「きっとブスだったから早く摘んでは貰えないという意味でそうなった」と思い込んでいた探訪子の蒙を啓く衝撃の笠原発言（「紅花の別名の一つが末摘花なんです。あの姫君は鼻が赤かったのが末摘花と綽名されたんですよ」）などは流石に割愛してしまおうと思う。でも、もう書いてしまったから消すのはやめよう。

きりがないので、どうしても書いておきたいこと一つだけに限定する。すると、..... 何故か筆が止まってしまう。探訪子の grey cells は抑制系に何か問題を抱えているらしい。あっ、でも思い出した。『夏休み親子科学教室』だ。平成 18 年 7 月 25 日に山形衛研は、大勢の親子を所内に招き、「発見！花の色の秘密」と題して紅花染めの教室を開いた。子供も親も紅染め（べにぞめ）という『小さなミラクル』に吃驚すると同時に、その楽しさを十分に堪能したらしい。理科離れが慨嘆されつつある今日、斯様な機会を衛研が社会に向けて提供することは實に意義深い。衛研という『市井の理科室』の存在を世の中から認知して貰う為にも、次代を擔う子供達にサイエンスの楽しさを知って貰う為にも。



写真 12 理化学部集合写真。扇風機の存在が嬉しい（個人的趣味と環境保護の観点から）。

## (VI) 辞去前に所長室で芋煮を御馳走頂き感激の大汗

馬見ヶ崎河川敷で毎年開催される『日本一の芋煮会フェスティバル』では直径 6m の超巨大鍋が使われるそうだが、理化学部から所長室に戻って来た我々を待っていたのは約 50cm の鍋だった。探訪子のラボでも、丁度同じ位の大きさの鍋が談話室に常備されており、中国から客人があった時に水餃子を作ったり、猪肉の頂戴物をした時に牡丹鍋を楽しんだり、忘年会で手作り蕎麦を茹でたりする際に大活躍してくれているから、山形衛研と『鍋友達』になった気がする。



写真 13 鍋奉行、齋藤一夫技監。

この芋煮の美味を文字で読者に伝えることは勿論不可能である。しかし味わった感激を伝えることは、例えば、定時を過ぎて空調が運轉停止した為に上昇した室温と、参集した所員の体温と情熱と、そして喉元通過時に芋煮から供給される熱とによって汗腺が全開し、額から噴出し瀧の如く流れ落ちていった大汗の中には、實は探訪子の涙腺からの分泌物も少々紛れ込んでいた、と書くことによって少しは可能かもしれない。結句、有難き『もてなしの心』がこの芋煮の隠し味であって、不覺にも私はその特別



の隠し味に噓せてしまったのである。

隠し味といえば、.....「今度山形へ来られた時は、河原へ行って芋煮をやりませう」という齋藤技監の言葉には、悪友三人組（齋藤・大谷・探訪子）にだけ理解可能な秘密のメッセージ（=隠し味）も籠められていた。

午後六時、榮研化学の三名と探訪子は、勿體なくも阿彦所長以下玄關先にズラリ並んだ所員の方々に見送られ、タクシーに乗り込み、次第に激しさを増して行く雨の中を、蔵王の宿へと一路進軍した。颯風九號との格闘を翌日に控えつつも、其の日三度目の芋煮を蔵王の宿で味わいながら、「やっぱり衛研のが一番おいしかったですな」等と、暢氣なことを云い合う。實に、嵐の前の能天気であった。

（註：山形衛研の人々にも随分御心配頂いたので、翌日のことを少しは書いておくべきかもしれない。道路冠水により危うく陸の孤島と化しつつあった蔵王を危機一髪脱出した我々は、山形新幹線終日運休の報に接して急遽仙台へと車で山を越え、仙台から東北新幹線にて無事歸京することを得た。斯かる非常時に於いて榮研化学諸兄弟が見せた行動選擇は臨機應變、實に手慣れたものであり、平時に於ける彼等の非凡なる能天気ぶりからは全く想像もつかないものであった。流石に、珍道中の常連だけのことはある。）

### おわりに

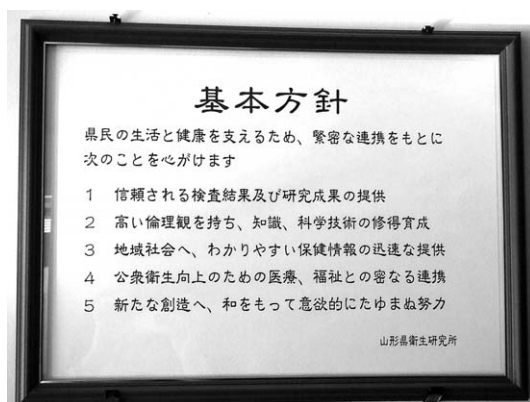
山形へは今回が処女旅行だった。従前、私生活上

も仕事上も、山形は疎遠の地だった。極言すればサクランボと藤澤周平しか知らなかった。そんな私の『山形初體驗』の相手が山形衛研だったことを素直に喜びたい。山形衛研の人々は、誰も彼も皆、優しくかった。

それにしても、あの優しさは何處から来るのだろうか。山形人全般がそうなのだと思わずには未だ経験も知識も不足しているから、『山形衛研の人々の優しさの秘密』に問題を絞って考えざるを得ない。

阿彦所長の人柄が所内に傳染した可能性は勿論ある。優れた研究業績が出續けていることから来る心理的餘裕が、心の優しさを生み出している可能性も勿論ある。しかし、もっと積極的な何かが作用していそうな気がしてならない。

ひょっとするとこれだろうか？



寫眞 14 山形衛研の基本方針。廊下に掲げてあった。

このうちの5の「和をもって」という部分である。

（探訪子＝三代俊治）